

『第9回遺跡発掘調査報告会』・

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団設立10周年記念公開シンポジウム

『よみがえる青田遺跡』開催される

平成14年3月9日・10日、新潟市の新潟テルサにおいて「第9回遺跡発掘調査報告会」並びに「公開シンポジウム・よみがえる青田遺跡」が開催されました。平成13年度は当事業団が設立されて10年目という節目の年に当たることから、例年の遺跡発掘調査報告会に加え、川辺に営まれた縄文集落として、全国的にも注目を浴びた青田遺跡に焦点を絞った公開シンポジウムを企画しました。

今回の公開シンポジウム「よみがえる青田遺跡」の実施にあたり、平成12年に考古学をはじめとし、地質学、植物学、建築学など様々な分野の研究者の方々に参加していただき、青田遺跡検討委員会を立ち上げました。約2年間に及ぶ青田遺跡検討委員会の研究によって、青田遺跡の様相が様々な角度から次第に明らかになり、今までの縄文時代のイメージを変えるような新たな発見などもありました。こうした成果をいち早く一般の方々に伝えるのが、今回の公開シンポジウムの大きな目的だったといえます。

2日間にわたり、基調講演、研究報告、パネルディスカッションなどが行われましたが、おかげさまで両日合わせて2,002名の参加者に恵まれ、大盛況のうちに会を終了することができました。参加者の方々からは、好意的なご意見やご感想を多数いただき、主催者としても当初の目的をほぼ達成できたのではないかと考えています。紙面をお借りし、参加者並びに関係者の方々に、改めてお礼を申し上げます。



白熱したパネルディスカッションの様子

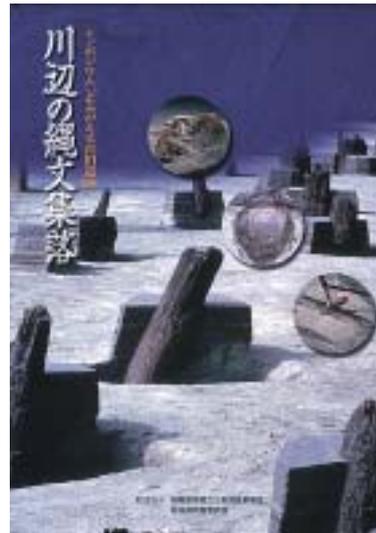
第9回遺跡発掘調査報告会

今年度は、岩倉遺跡（糸魚川市）、寺地遺跡（青海町）、川久保遺跡（湯沢町）について報告が行われました。

岩倉遺跡の礎石建物跡（15世紀末～16世紀半ば）については、文献等の調査から梶屋敷地区に現存する万徳寺の前身とする推測がなされました。また、出土した信仰道具の木簡や人形、陶磁器、鉄器などについての報告もありました。

寺地遺跡では中近世の（旧）松尾神社と考えられる遺構や、同時代の森林開墾の様子が報告されました。また、縄文時代については国史跡（寺地遺跡）範囲と比べ、遺構・遺物が極端に少ないことから、縄文時代においては、集落の南端にあたっていたようです。

川久保遺跡では縄文時代中・後期の遺構を中心に説明がおこなわれ、土器の特徴から関東や南東北など周辺各地との交流が指摘されました。また、河川に近いという立地から、遺跡周辺がしばしば氾濫による災害を受けたことも報告されました。



シンポジウム資料集



報告会資料集

公開シンポジウム「よみがえる青田遺跡」

第1部「青田遺跡と縄文文化」

公開シンポジウムは、平成11年度から3年間にわたって発掘調査にあたった事業団の荒川隆史からの報告で始まりました。青田遺跡（加治川村）は縄文時代晩期の低湿地に立地する遺跡で、多くの掘立柱建物跡や土器、石器、木製品などの出土が見られ、全国的に注目を集めている遺跡ですが、青田遺跡を熟知している担当者からの報告は、遺跡の性格や概要を知る上で有意義であったといえます。

この発掘調査報告を受けて、國學院大学の小林達雄氏から「縄文世界の青田遺跡」という演題で基調講演をいただきました。青田遺跡の特徴や考古学上の意義について、明快に語っていただきましたが、時折繰り出されるユーモアたっぷりの話に会場は何度も笑いの渦に包まれました。また、広い視点から見た青田遺跡の存在価値や縄文社会のもつ特質などについてもふれられ、翌日の公開シンポジウム第2部では、これらの話がどのように展開されていくのかという期待を抱かせる内容の基調講演でした。



基調講演を行う小林達雄氏



スライドを用いての報告

第2部「青田遺跡 - 縄文人の生活と環境 - 」

第2部では、青田遺跡の様相解明のために設置された青田遺跡検討委員会のメンバーである5名の方々から、最新の研究成果についての報告が行われました。新潟大学の高濱信行氏は地質・地層の分析から、遺跡周辺の地形変動や自然景観の変遷について報告があり、青田縄文人をたびたび襲った自然災害（洪水・地震）を明らかにしました。東北大学の鈴木三男氏は出土した花粉や樹木の分析から、現在の栽培種に匹敵する大型クリの大量出土について、クリは遺跡周辺に生えていたのではなく、水運を利用してある程度離れたところから、実や木材を運んできていたのではないかと指摘しました。東北芸術工科大学の宮本長二郎氏は掘立柱建物跡から住居の復元を行い、北海道アイヌ民族のチセ（家屋）や富山・岐阜県下に伝わる根萱民家との類似性を示しました。また、東京都立大学の山田昌久氏からは木製品から見た他集落との交流、生業や生活における木や草の利用について、明治大学の石川日出志氏は出土した土器から関東や東北地方との交流を指摘するなど、それぞれの分野から青田遺跡の興味深い面を浮彫りにする報告が相次ぎました。

パネルディスカッション「青田遺跡を語る」

午後からは「青田遺跡を語る」というテーマでパネルディスカッションが行われました。司会に小林達雄氏とNHK新潟放送局の三上弥アナウンサーを迎え、青田遺跡検討委員会の方々からはパネリスト、コメンテーターを担当していただきました。「青田ムラと自然環境」「青田縄文人の生活誌」「青田遺跡の諸問題」の3つのテーマに沿って、聴衆の方々から出していただいた質問なども交えて青田遺跡の分析、討論を進めました。持論の相違から活発な討論になる場面が見られたり、コメンテーターの岡村道雄氏から青田遺跡の発見当時の驚きと印象を語ってもらうなど内容豊かなパネルディスカッションになりました。



展示に見入る参加者



熱心な質疑応答



パネルディスカッション



にぎわう1階展示会場

平成13年度の事業団発掘調査一覧

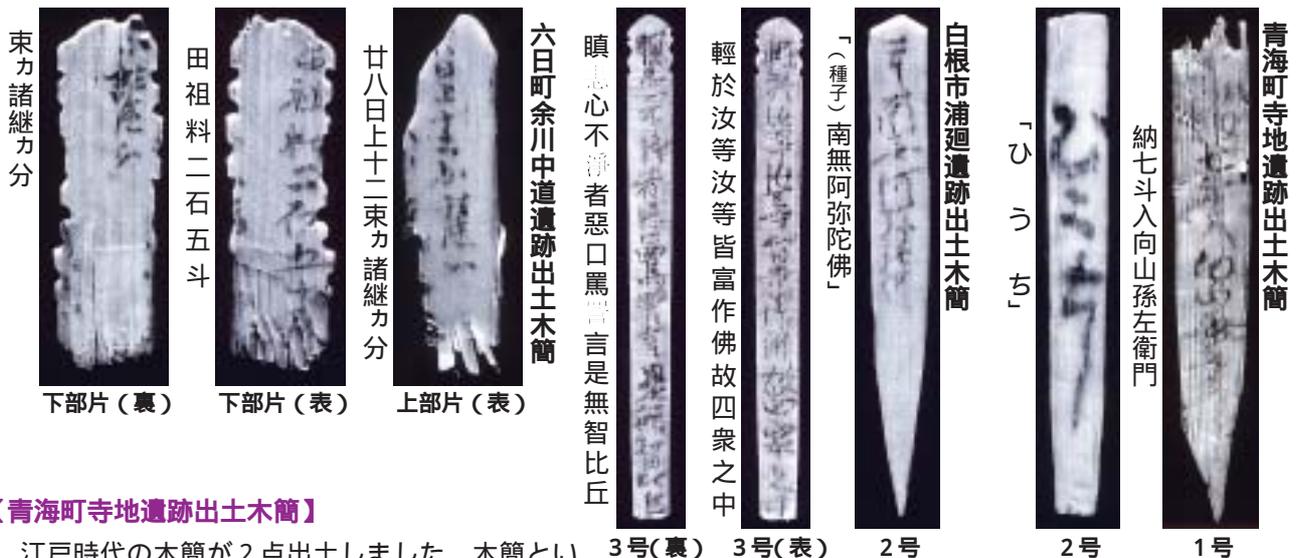
二次調査

事業	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積		時代	遺跡の内容 遺構・遺物	備考	
				対象(m ²)	調査(m ²)				
日本道路公団	東北自動車道 日本海沿岸	青田	加治川村	3/23～9/21	11,440	11,440	縄文時代	掘立柱建物跡(柱根残存)・草敷土坑・ピット・埋設土器・石器・釜(うけ)・糸玉	発掘調査完了 15年度報告書刊行予定
		道端	荒川町	6/4～10/31	8,000	8,000	縄文時代(晩期) 古墳時代	縄文土器・石鏃 ピット・土師器	14年度も継続発掘 13年度一部報告書刊行
		正尺A	豊栄市	8/3～8/31	260	260	古墳時代(前期)	竪穴住居跡・土坑・土師器	報告書は正尺Cと合本
小計				19,700	19,700				
鉄道建設公団	北陸新幹線	寺地	青海町	4/9～11/2	3,210	3,210	縄文時代	埋没林・水場遺構・縄文土器・石器	14年度報告書刊行予定
							中世～近世	神社跡・鰐口・舟型・木簡・陶磁器・銭貨・木器	
小計				3,210	3,210				
国土交通省	7号中条黒川BP 8号糸魚川東BP	蔵ノ坪	中条町	4/11～7/13	1,360	1,360	平安時代	掘立柱建物跡(柱根残存)・河川跡・畝状遺構・墨書土器・土師器・須恵器	14年度報告書刊行予定
		岩倉	糸魚川市	4/16～10/3	4,700	4,700	中世～近世	礎石建物跡・方形区画(水田?)・中近世陶磁器・木簡・土製品・石製品・金属製品	14年度報告書刊行予定
		小計				6,060	6,060		
総計				28,970	28,970				

一次調査

事業	遺跡名・調査地区名	所在地	調査期間	調査面積		時代及び二次調査対象面積		備考
				対象(m ²)	実績(m ²)	時代	対象面積(m ²)	
日本道路公団	日本海沿岸東北自動車道	西部遺跡	神林村	4/16～4/26	19,000	520	古代・中世	二次調査必要 西部遺跡
		福田遺跡	中条町	4/9～4/12	48,600	3,190	古墳・古代	二次調査必要 西川内南遺跡
				5/8～6/7				二次調査必要 西川内北遺跡
				11/27～11/30				二次調査必要 反貫目遺跡
		推定地7	中条町	6/11～6/14	13,900	630		二次調査不要
		推定地5	中条町	8/3～8/20 9/6・7	15,000	940	縄文	二次調査必要 道下遺跡
		推定地3	中条町	6・7	19,010	1,920	縄文後期・晩期	二次調査必要 野地遺跡
		道端遺跡	荒川町	8/29・30 9/25～11/6	29,000	1,400	縄文・古墳	9,800 二次調査必要 道端遺跡
		推定地2	中条町	9/20～10/2	68,000	2,200	古代	二次調査必要 沢田遺跡
		推定地6	中条町	9/20～10/2	42,000	3,500	縄文晩期 縄文後期	二次調査必要 昼塚遺跡 二次調査必要 江添遺跡
推定地1	中条町	10/3～11/26	85,320	4,890	古墳 古墳	二次調査必要 六斗蒔遺跡 二次調査必要 一杯田遺跡		
小計				339,830	19,190			
鉄建公団	北陸新幹線	吉増地内	板倉町	5/28～6/1	7,700	350		二次調査不要
		田海地内	青海町	6/19～7/3	18,200	530		二次調査不要
小計				25,900	880			
国土交通省	17号浦佐BP	浦佐地内	大和町	4/23～4/25	6,200	150		二次調査不要
	49号揚川改良	六角原遺跡	津川町	6/11～15 9/12～19	7,500	870		拡張一次調査実施 工用道路試掘
	17号六日町BP	余川地内	六日町	7/9～7/12 11/8～27	17,040	1,190	古墳	全域の調査未了 再調査範囲あり余川中道遺跡
	8号白根BP	戸頭地内	白根市	7/23～8/10	35,740	1,720	中世	6,800 二次調査必要 浦廻遺跡
	8号柏崎BP	下方地内	柏崎市	8/21～9/7	21,890	1,060	古墳・平安・中世	6,500 二次調査必要 再調査範囲あり 下沖北遺跡
	253号八箇峠道路	川窪地内	六日町	9/10 10/18・19	2,430	130		二次調査不要
	253号上越三和道路	米岡地内	上越市	3/4～8	14,000	340	古代・中世	6,800 二次調査必要 下割遺跡 再調査必要
小計				104,800	5,460			
総計				470,530	25,530			

平成13年度調査で出土した木簡



【青海町寺地遺跡出土木簡】

江戸時代の木簡が2点出土しました。木簡といふと古代・中世が多く、江戸時代にはなくなってしまった様なイメージを受けます。しかし、書かれた文字を削り取れば再度使える木簡は、その利便性から一昔前まで使われていました。自分の名前が書かれた木札を昔どこかで使った覚えのある人もいるのではないのでしょうか。

1号木簡は、納入する年貢米に付けられた荷札と思われる。「納～斗入」という書き方は北陸地方独特のようで、佐渡奉行所跡などでも出土しています。年貢は分割して納入されますが、その1回分の米「七斗」と納入者の「向山孫左衛門」が記されています。1つの解釈として青海町大字歌には今でも家号「向山孫左衛門」と称する家が存在し、この家の御先祖様が納入の際に使ったと考えられます。

2号木簡に記されたのは、地名と考えられます。付近には火打山がありますが、むしろ、旧寺地村の検地帳に村内の町名として「火打町」と記されているので、このことと思われます。

【白根バイパス確認調査：浦廻遺跡出土木簡】

白根バイパス予定地内の遺跡の有無を確認する調査で4本が出土しました。上の写真にはその内2本を掲載しました。調査地点は近世の絵図を見ると道瀉という瀉湖の縁辺付近で、現地地表下約2mで出土しました。一緒に出土した遺物等から他の場所で使われ、流れついたものと思われます。

1・2・4号木簡は、卒塔婆といわれる木簡です。一番上の字は種字といって一人一人の仏様を表すマークのような文字です。その下に仏様のお名前(名号)が記されています。普通、名号と種字は同じ仏様のものが記されるのですが、2号木簡は異なっているのが特徴です。加茂市舞臺遺跡からも一致しない木簡が出土しています。両遺跡とも青海荘という荘園の範囲内なので、関連性が注目されます。

3号木簡は薄い板にお経を写した柿經という木簡です。『法華経』(妙法蓮華経常不輕菩薩品第二十)というお経が表裏に記されています。上端両側の切り込みは丸く仕上げられ、五輪塔を真似ています。13世紀後半～14世紀前半の木簡と思われます。

【六日町バイパス確認調査：余川中道遺跡出土木簡】

2点出土しましたが、木目(年輪幅)が一致するので元々は1本だったものが折れてしまったようです。「田租」とは古代の「租」という税のことと思われます。田の面積に応じて稲を納入させられたので田租ともいいます。両側縁が鋸の歯のようにギザギザなのは、いったん用を終えた後、齋串という祭祀道具に再利用されたと考えられます。木簡の時期は、古代と考えていますが、詳細は不明です。解読できない文字や、内容についても不明な部分が多く、今後明らかにしてゆきたいと思いますが、山間部の魚沼で初めて出土した木簡です。

他にも解読中の岩倉遺跡の木簡があります。また、今後、沖積地での調査も予定されていることから、木簡などの出土が期待されます。余川中道遺跡出土の木簡については、国立歴史民俗博物館の平川 南先生よりご指導をいただきました。また、写真の釈文は一部簡略化しました。

(田中 一穂)

新刊報告書の紹介

書名	松影A遺跡(まつかげAいせき)				
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松影A遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	土坑34基・ピット34基・焼土2基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器(銚先様の尖頭器)	東北系弥生土器の充実

書名	正尺A遺跡(しょうじゃくAいせき)				
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正尺A遺跡	集落	古墳時代前期 江戸時代	竪穴住居跡 土坑	土師器・須恵器 陶磁器・木製品	

書名	小重遺跡(こじゅういせき)				
副書名	一般国道18号改築工事関係発掘調査報告書				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小重遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡9基 陥し穴土坑24基	縄文土器・石器	
	集落	不明	掘立柱建物跡1基 集石土坑		
	古銭出土地	中世	銭貨埋納土坑1基	銭貨29,000点	

書名	箕輪遺跡(みのわいせき)				
副書名	一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箕輪遺跡	遺物包含地	弥生時代(中期後半) 平安時代 (9世紀後半~10世紀初頭)	土坑・溝・ピット	弥生土器・石器・石製品(勾玉・管玉)・土師器・須恵器・木製品(榎・杭ほか)	

書名	八反田遺跡(はつたんだいせき)・高畑遺跡(C地点・二期線)(たかばたけいせきちてん・にきせん)				
副書名	北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書 VII				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八反田遺跡	集落	縄文時代前期	竪穴建物跡5基・土坑	縄文土器・石器	
	集落	平安時代 (9世紀後半~11世紀末)	掘立柱建物跡5基・柵列・井戸・土坑・ピット・溝	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製品・石製品	
	集落	中世 (12世紀前半~13世紀後半、15・16世紀)	掘立柱建物跡2基・井戸・土坑・ピット・溝	中世土師器・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・青磁・白磁・漆器・木製品・石製品銭貨	溝に囲まれた屋敷地
	道路	近世	路面3面・溝	肥前陶磁器・寛永通寶	加賀街道
高畑遺跡	集落	平安時代~中世	掘立柱建物跡2基・井戸・ピット・溝・河川跡	土師器・灰釉陶器・珠洲焼・石製品・木製品	

書名	黒田古墳群(くろだこふんぐん)					
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
黒田古墳群	古墳	古墳時代中期~古墳時代後期初頭	円墳11基・方墳2基・木棺墓1基	土師器・須恵器・白玉・管玉・管玉未成品・竪櫛・砥石・鉄製品(鉄刀・鉄剣・刀子・鉄斧・鑿・鋤先・鏝)	蛇行剣(木棺墓出土)	
	集落	縄文前期	竪穴建物跡・陥穴状土坑	縄文土器・石製品・管玉		
	遺物包含地	縄文草創期			有舌尖頭器	
		縄文中期・晩期			縄文土器・石器	
		平安時代	土坑		土師器・須恵器・墨書土器・瓦塔	
	中世			珠洲焼・青磁・銭貨		
	江戸時代		掘立柱建物跡1棟・土坑	陶磁器		

書名	道端遺跡(みちばたいせき)				
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道端遺跡	集落	古墳時代前期(4世紀) 後期(5世紀末~6世紀前半)	ピット3基	土師器・須恵器	集落縁辺部に存在する土器集中域
	散布地	縄文時代(後期) 弥生時代(中期) 平安時代 室町時代 江戸時代		縄文土器・弥生土器・須恵器・青磁・珠洲焼・中世土師器・肥前焼・瀬戸焼・中国産磁器・石器・石製品・漆器・木製品・土製品・金属製品	

埋文コラム「発掘から見てきた漁具の歴史」

現在、世界的にも有名な漁業国である日本の漁業の開始は、縄文時代早期までさかのぼります。今回は、網漁法、釣漁法、誘導による方法、それぞれの漁具について県内遺跡の出土品を中心に紹介します。

網による方法... 錘

石錘・土錘・貝錘などはいずれも網漁法・釣漁法の錘として広く用いられていたようです。漁具の材料が植物質のものは、腐って残りにくく、網漁法について当時の姿を語る遺物は錘だけといった状態です。これらの錘は、漁網を水中に沈めたり、浮子と併用して魚網を水中で安定させる役割をしていました。小千谷市城ノ腰遺跡（縄文時代中期～後期）では、礫石錘688点、土錘2点、軽石製品6点が出土しています。礫石錘の用途は、編物錘とする説もありま

すが、共に出土した軽石製品の一部は浮子に利用されたと考えれば、これらの石錘、土錘も共に漁具として用いられていた可能性があります。



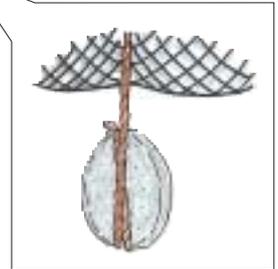
土錘
(城ノ腰遺跡)



石錘
(城ノ腰遺跡)



軽石製の浮子
(城ノ腰遺跡)



釣りによる方法... 釣針

釣漁法の代表的な遺物は、釣針です。釣針の素材には、猪の牙・鹿角などの骨角・牙製品と青銅・鉄製品などがあります。その形態も多様で、狙う魚種や環境の変化に応じた使い分けがなされていました。巻町城願寺跡（13～20世紀半ば）の中世層からは、鉄製の釣針が220点余り出土しています。また、その土壌から、魚の骨が多数検出されました。大半が調理や食事の際に出る残飯とみられます。今後、魚種の同定が行われると、当時の漁村の生活が垣間見られるかもしれません。

誘導による方法... 筥

現在でも、日本及び世界中で広く使用されている漁具のひとつで、竹や木の枝を編み、胴の中に「返し」をつけて、中に魚が入ったら出られない仕組みになっています。河川や池、沼といった身近な水中に沈めて、小魚や雑魚を獲ることができます。加治川村青田遺跡（縄文時代晩期）でも、筥が2点出土しています。青田遺跡で出土した筥は現在のものとほぼ同じ仕組みで、先人の知恵には驚かされます。



筥（青田遺跡）

引用・参考文献

- 「縄文時代の漁業」 雄山閣 渡辺 誠著 1984
- 「装身具と骨角製漁具の知識」考古学シリーズ 東京美術
江坂 輝彌 渡辺 誠 1988
- 「城願寺跡・坊ヶ入墳墓」 巻町教育委員会 1985
- 「月刊考古学ジャーナル3」 ニューサイエンス社 1992



県内の遺跡・遺物36

あわしま せきぞう いぶつくん
粟島の石造遺物群（平成元年 県指定）

遺物所在地：新潟県岩船郡粟島浦村内浦158番地ほか

日本海に浮かぶ岩船郡粟島は、中世の頃、西方極楽浄土の途中、観音菩薩の住む浄土として信仰を集める海上の霊場と考えられていました。人々はこの霊場に板碑などの石造供養塔婆や石仏、石神などを造立することにより、死者や自分の死後の極楽往生を願いました。これらの石造遺物は、島の東岸に位置する内浦の観音寺周辺に今でも多く残っています。

板碑は板状の石に主尊として梵字や梵字を組み合わせた象徴文字である種字を彫った塔婆であり、粟島には100基あまり存在し、県下板碑の最密集地となっています。粟島の板碑は多彩な種字や荘嚴体の多用、添え彫りや自然石に「南無阿弥陀仏」の梵字名号が刻まれている点などで、全国的にみても、類例のないものが多いといえます。また2基の板碑に記される「文和」という年号や他の板碑同士の彫相が類型化していることから、これらは南北朝期の限られた時期に集中して造立されたと推測できます。

板碑以外の石塔や石仏なども、全体的に優美な姿や様式などから、南北朝時代の初期から中期の造立と推定されます。



自然石に刻まれた「南無阿弥陀仏」
 （写真提供：粟島浦村教育委員会）



粟島の板碑群（写真提供：粟島浦村教育委員会）

埋文にいがたNo. 38

発行（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956 - 0845 新津市金津93番地 1 e-mail: maibun@coral.ocn.ne.jp

TEL (0250) 25 - 3981 FAX (0250) 25 - 3986

印刷（株）文久堂